



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1931, 15(5): 396-402

ISSUE DATE:

1931-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183895>

RIGHT:

をつけるのは不當である。故にまづ東木君の地記學とでも見るべきものであつたと思ふがどうであらうか、しかし予はかうした書が出版されうる程に果して世の中が地學を愛好するやうになつた現代の傾向を喜ぶ。(藤田)

雜 報

○昭和五年蘭の産額

農林省發表

養蠶戸數 二百二十一萬五千六百四十五戸、蠶種掃立枚數

千八百五十五萬七千四百十枚

内春蠶 八百四十六萬六枚、夏秋蠶 千九萬七千三百三十

四枚

繭産額 一億六百四十六萬四千五百十六貫、價額 三億四

百二十四萬五千七百六十八圓

内春蠶 五千六百十萬三千百三十六貫、價格 二億千三

十六萬八千九百九圓、夏秋蠶 五千三十六萬千三百八十

貫、價格 九千三百八十七萬六千八百五十九圓

にして前年度に比し 養蠶戸數 九五七月(四毛)減、蠶種

掃立枚數 五十九萬五千六百九十五枚 三分一厘減、繭産

額四百三十七萬千三百二十二貫(四分二厘)増

一般に五年度は氣候も順調成績良好にして、右の通り昨年

より四分三厘の増加となつた。

今全國府縣別に見るに左表の通りである

府縣別	蠶種掃立枚數	收 入			
		總 數	春 蠶	夏 秋 蠶	高
總 數	一八、五七、四〇一	四、四六、五三六	一、〇〇、三三〇	三、四六、二〇六	
北海道	八、四八一	三、八三三	一、〇〇、三三〇	二、八三三	
東北區					
青 森	一九、四二八	一、六、九七四	八六、六〇〇	三〇、三七四	
岩 手	一七、四四五	一、〇、九五一	八四、六九七	二九、七五七	
宮 城	二六、七三〇	一、八七、七九	一、〇〇、六三三	七六、七七七	
秋 田	五、〇七三	三、六五一	三三、〇〇〇	二、二八、三	
山 形	四、二六〇	二、六九、五一	一、五八、五二	一、〇九、九〇〇	
福 島	七、九七九	三、九七、六五	二、三六、三六	一、七〇、七六	
關 東區					
茨 木	七二、四四	三、八八、四六	二、〇〇、六九	一、八七、五九	
栃 木	一九、五〇三	一、〇七、〇〇〇	五九、五〇	四七、〇〇〇	
群 馬	一、五九、三四	六、七四、六〇	三、五四、三九	三、二〇、二一	
埼 玉	一、九一、〇〇	五、〇六、二二七	二、九六、四五	二、一〇、七七二	
千 葉	四、六、二四	二、四四、七九	一、三〇、二四二	一、一四、四五	
東 京	三、四、八七	一、七六、四七	八二、六九	八八、六八	
神奈川	三、〇、六七	一、八二、六九	一、〇四、二七	八八、四二	
北 陸區					
新 潟	一、〇、四四	一、六〇、六六	一、〇七、六六	五九、九〇〇	

富山	四、一〇一	二、八、五三	一、五、一、八	八、七、五〇
石川	一、〇、三、七	六、五、九、五	三、八、五、四	二、七、四、〇
福井	七、九、七	四、八、四、四	二、八、〇、七	一、八、四、七
東山	區			
山梨	八、五、〇、二	四、六、七、〇	二、九、五、九	二、二、九、四
長野	二、四、七、〇	三、〇、三、三	五、六、六、四	七、九、九、五
岐阜	八、三、三	四、七、二、〇	二、五、六、一	二、四、五、八
東海	區			
静岡	四、七、三、七	二、七、二、九	一、五、一、〇	一、四、一、七
愛知	一、四、二、〇	六、二、一、三	三、四、五、〇	三、〇、六、五
三重	七、八、〇、三	三、八、七、二	二、〇、四、〇	一、八、二、九
近畿	區			
滋賀	一、三、六、五	八、〇、七、〇	五、三、一、七	四、三、五、四
京都	二、七、八、〇	一、八、六、三	一、二、九、八	七、三、三、四
大阪	八、一、八、四	五、四、六、四	三、四、八、四	三、九、〇
兵庫	三、三、三、〇	一、八、三、一	一、三、六、六	五、九、五、六
奈良	一、八、〇、五	一、〇、七、七	五、六、五、〇	六、二、一、〇
和歌山	三、七、元	一、七、九、〇	七、九、〇、六	五、九、九、七
中國	區			
鳥取	三、七、九、九	二、〇、九、五	一、三、六、六	一、〇、四、六
島根	二、五、〇、三	一、八、五、五	九、七、〇、六	八、九、三、八
岡山	三、三、七、九	二、一、七、九	一、二、〇、六	九、九、〇、六
広島	二、四、九、八	一、四、九、三	七、八、四、九	六、九、一、三

雜報

山口	九、〇、六、一	五、三、〇、五	二、九、四、二	三、六、一、〇
四國	區			
徳島	三、〇、三、七	二、三、三、四	一、三、六、〇	一、二、七、三
香川	八、六、〇、九	四、八、三、八	三、六、〇、九	三、七、八、五
愛媛	五、三、三、八	三、〇、七、七	一、五、九、三	一、四、七、四
高知	二、八、九、二	一、九、三、八	一、〇、八、六	八、五、四、八
九州	區			
福岡	二、五、三、九	一、三、三、六	七、九、一、三	八、四、一、〇
佐賀	二、四、六、八	七、五、九、五	四、九、四、七	三、六、二、三
長崎	二、四、〇、八	一、六、五、五	五、八、三、三	五、八、三、九
熊本	四、三、八、五	二、八、六、八	一、三、三、四	一、五、三、六
大分	二、七、五、六	一、七、七、二	九、〇、九、七	八、六、三、四
宮崎	三、八、五、五	一、九、八、〇	九、三、五、三	九、九、四、五
鹿児島	三、六、一、五	二、四、〇、七	一、二、九、九	一、三、〇、八
沖縄	二、一、七、三	三、六、七、三	三、三、七	一、六、四、五

右表中百萬貫以上の産額高がある府縣を見るに東北區では福島、山形、宮城、岩手の四縣、關東區では群馬、埼玉、茨木、栃木、千葉、東京、神奈川の全部、北陸區は富山、新潟の二縣、東山區では長野の一縣、東海區は静岡、愛知、三重と全體、近畿區は京都、兵庫、奈良、和歌山の四縣、中國區は山口を除く全部即ち四縣、四國は徳島、愛媛、高知の三縣九州區は佐賀を除く全體即ち六縣で全國合計三十五府縣である。

而して其産額順序より見るに長野縣は斷然他を抜き一千三百萬貫餘で全國の一割二分強に當る。次は群馬、愛知の順で共に六百萬貫餘、埼玉が五百萬貫代で第四位、次は山梨、岐阜で四百萬貫代である。三百萬貫級に福島、茨木、三重、愛媛の四縣あり、下つて二百萬貫級に至ると山形、千葉、静岡鳥取、岡山、徳島、熊本、鹿児島、八縣である。

最も少いのは北海道で僅か三萬五千貫、次は沖縄で三萬八千貫餘共に氣候の關係であつて帝國内地の南北兩地が寡少地帯である(吉田)

○歐亞連絡旅客運賃並に哩程

我國よりシベリヤ鐵道經由歐洲諸國行旅客運賃並に手荷物運賃は鐵道省運輸規定に既に明かである。即ち我國よりシベリヤ經由の連絡に三路がある。

一、我國—釜山(朝鮮經由)—奉天—長春—ハルピンを經るもの。

二、我國—大連—長春—ハルピン經由のもの。

三、敦賀—浦鹽廻りのもの。

而して我國より長春までの分は我統治範圍の鐵道であるから普通の旅行案内類にも其哩數なり貨錢、運轉時間等が詳細に記載されてあるので別に言ふまでもないが、長春以西又は浦鹽以西の鐵道の哩數又は貨錢に關し今回改正されたから序に其一班を述べやう。

第一表は長春基點の歐亞聯絡の哩數と運賃表で第二表は浦鹽經由の場合である。
故に今東京より釜山、長春シベリヤ經由パリまでの旅行なら東京から釜山長春迄の運賃哩數に右の表の長春—パリ間のを加へたものに等しいことになる。

第一表

區 間	經由驛港	距離	運 賃		
			一等	二等	三等
長春—チタ	ハルピン	一、四九五km	五〇・五元	二四・五元	一六・三七
同イルクーツク	同	二、六九五	四九・二七	二四・元	一三・六六
同オムスク	同	五、一七〇	六九・六七	三四・元	二二・六六
同スウエルドル	同	六、〇六七	七二・五九	三六・七	二四・八三
同フスク	同	七、八四〇	九二・五九	四一・七	二八・〇八
同モスコ	同	八、五五〇	一〇二・五九	四六・四	三二・六三
同レニングラー	同	八、五五〇	一〇二・五九	四六・四	三二・六三
同ハリコフ	同	八、六七〇	一〇三・六〇	四七・七	三三・五二
同ターリン	同	八、九三〇	一〇五・五九	四九・五二	三五・七三
同リガ	同	八、九四〇	一〇六・五七	四九・元	三五・六二
同ストルブツエ	同	八、七八〇	一〇三・三九	四八・〇九	三五・七六
同ワルソー	同	九、九二〇	一二二・四二	五七・五	三八・四〇
同ロツツ	ハルピン	九、三三〇	一一四・五二	四八・八三	三二・六六
	ワルソー				

同ブラーグ	同	九・九二	二四・二七	〇〇・六九	六七・一六
同マリエンバー	同	一〇・六三	二八・七二	一〇・三三	六八・九四
同ドカルルスバー	同	一〇・六二	二八・五五	一〇・三三	六八・八六
同ウイーン	同	九・八八	二四・五五	〇一・二二	六七・二六
同カウナス	ハルビン	九・三九	二〇・二二	九二・五五	六二・〇九
同チエフ	同	九・六四	二〇・七七	九・四	六五・一四
同ホイニツエ	同	九・七四	二二・九	一〇・八五	六二・一〇
同ダンチヒ	同	九・七六	二二・七	九・七	六二・三六
同ベルリン	ハルビン	九・七五	二二・四三	一〇・二五	六二・六三
同アルトナ	同	一〇・四七	二二・七五	一〇・二五	六二・七〇
同ライプツヒ	同	九・九三	二八・八七	一〇・三・四五	六八・六〇
同ミュンヘン	同	一〇・一〇	二二・五	一〇・〇一	七二・九三
同ケルン	同	一〇・四四	二九・九九	一〇・八・九	七二・二二
同アーヘン	同	一〇・七五	二四・九一	一〇・九・九	七二・八六
同リエージュ	同	一〇・八二	二四・九五	一〇・六五	七二・三三

同ブルツセル	同	〇〇・五八	二四・四五	二二・六五	七二・八二
同オスタンド	同	〇・六五	二四・一五	二二・八五	七四・五三
同バリ	同	一〇・八六	二四・五	二二・二三	七二・〇八
同カレ	同	一〇・七五	二四・九	二四・三〇	七二・五九
同ベニス	同	一〇・五五	二四・三二	二二・三五	七二・〇〇
同	同	一〇・三三	二四・八三	二〇・五七	七二・〇二
同	同	一〇・四九	二四・五五	二二・六	七二・八六
同	同	一〇・五二	二四・六三	二二・八一	八二・四四
同	同	一〇・八四	二四・六五	二二・九五	七二・七四
同	同	一〇・八八	二四・七	二二・九三	七二・六

同ゼノア	ハルビン ウイリン	一〇・九七四 一四八・〇〇九	二七・五五	六・〇〇
同同	ハルビン リガ・ベル リン	二・二九八 二・五三三	一六・〇〇七 二三・〇三	八〇・三

尙ウラヂオストック經由の場合 外國側の運賃はウラヂオ
ストック、チタ間(ハルビン經由)乃至ウラヂオストック、ゼ
ノア間、ハルビン、ワルソー又はリガ、ベルリン經由)の二通
りあるが其距離又は運賃は左表の通りである。

第二表

區 間	經由驛港	距離 km	一等 金銀	二等	三等
ウラヂオ ストックチタ	ハルビン	二・二九八	四九・八九	三・六二	三・七三
同イルク ツツ	同	三・三三六	五九・七七	四・九	二八・三
同オム スク	同	五・七二	八〇・二七	六・八九	四一・九
同フス ク	同	六・〇六八	八八・〇九	七・八二	四七・一八
同モス コー	同	八・四四五	一〇六・四三	八九・二七	五九・四三
同レニ ングラ	同	九・〇八一	一一・七九	九四・五	六二・九八
同ハリ コフ	同	九・二二	一二・一〇	九五・八二	六三・八六
同ター リン	同	九・四七	一二・〇九	九七・六二	六五・〇七

同リガ	同	九・四四四	二七・〇七	九七・四九	六四・九六
同スト ルブツ エ	同	九・三九	二二・七九	六・二九	六四・二
同ワ ルソー	同	九・七三	二三・九	一〇・六五	六七・七五
同ロ ツツ	同	九・八七二	二五・〇二	一〇・九五	六八・六一
同ブ ラーグ	ハル ビン	一〇・五三	三三・七七	一八・七九	七・五一
同マ リエ ンバ ー	同	一〇・七三	三三・三	二二・四五	六四・元
同ド カル ルス バ ー	同	一〇・七二	三三・〇五	二二・五	七四・二
同ウ イ ン	同	一〇・四四	三三・〇五	二〇・五	七二・六
同カ ウ ナ ス	ハ ル ビ ン	九・七〇	二二・三	二〇・六四	六四・四
同チ エ フ	同	一〇・一八五	三三・七	二〇・七五	六〇・四九
同ホ イ ニ ツ エ	同	一〇・二八三	三三・六九	二〇・八・九五	一七・四五
同ダ ン チ ツ ヒ	同	一〇・二七	三三・八七	二〇・八七	七〇・七
同ベ ル リ ン	ハ ル ビ ン	一〇・二九八	三三・九五	二〇・八・五	七二・九
同ハ ン ブ ル グ	ワ ル ソ ー 又	一〇・五八八	四二・五	二二・三・五	七五・〇五
同ア ル ト ナ	同	一〇・九二	四三・七	二二・五五	七五・九
同ライ プ ツ ヒ	同	一〇・四六三	三三・七	二二・五五	七五・九
同ミ ユ ン ヘ ン	同	一〇・九五	二二・五	二二・八・二	七八・七

同ケルン	同	二〇・八七五	一五〇・四九	二七・〇元	七七・五元
同アーヘン	同	二〇・九四六	一五二・四一	二八・〇五	六八・二
同ソエージュ	同	二〇・〇〇	一五二・四三	二八・七五	七八・五七
同ブルツセル	同	二〇・九	一五二・四三	二九・七五	七九・一七
同オスタン	同	二二・二四	一五二・六	二〇・五	七九・八七
同バリ	同	二二・五七	一六〇・二五	二二・三	八二・四三
同カレ	同	二二・六〇	一五八・九	二二・四〇	八〇・九四
同ベニス	同	二二・三	一五八・八	二二・四	七八・五
同ローマ	同	二二・八六	一六・三	二八・七	八四・七
同	同	二二・五	一六・三	二八・九	八七・四

同ミラノ	同	二・六五	一五六・二五	二四・〇五	八二・〇元
同	同	二・八九	一六・八七	二九・三	八四・六二
同ゼノア	同	二・五五	一五二・五	二五・九	八二・〇五
同	同	二・七五	一七・五七	二〇・八三	八五・七

○ビルマの米

(吉田)

米作及精米はビルマの最大産業である、全人口の六割がこれに關係し米田は全耕地の七割に達し、産米の約六割が海外輸出である、ビルマと佛領インドとシヤムは今日の處世界の三大米輸出國であるが中にもビルマは卓然傑出し、世界に供給する米の三分一強をしめる輸入國たる日本は實に其のビルマ輸出米の三分一をしめる點からみてもビルマの米は注目されねばならぬ。

ビルマの米田は一九二〇年以來逐年増加し同年に米田は九百八十萬英町であつたが一九二六年に一千一百四十八萬英町に達した、たゞし一九二七年度には過去七年にない減落で一千百十四萬英町となつた、外に水が不足で收穫の出来なかつ

た田五十六萬英町に達した。全耕地一千五百二十萬五千英町に對して七割三分強の米田である、これを日本町に換算すると四、五四四、〇〇〇町で、同年の日本の水田三、一七四、〇〇〇町よりも百三十七萬町歩ビルマの方が多かつたのである、しかし其收穫は五百十萬噸（日本で三四、七二〇、八〇〇石）一町當り日本の三石一斗である、これは日本の田からみて非常にひくい、日本の田の生産力の四割四分しかない、即日本は同年一町當り七石一斗、シヤムは三石五斗であつたから、シヤムよりも悪いのである、又其品質も日本米又はシヤム米よりもわるい、故に日本米は東京で四十二圓四十八錢であるときシヤム米二十六圓十錢、サイゴン米二十一圓、十錢であつたがビルマ米は二十一圓であつた。

ビルマの農民は自ら精米をなし精米を賣ることをしない、粃の儘賣放つから其所得は更らに減ずる、それを粃、精米、煮米、碎米及其他の五種の形として輸出する、其市場はインドであつて、セイロン、ドイツ、海峽殖民地、日本等これに、一九二七年以後この國も世界的不況のために、米の輸出はかばかしくない。サイゴンや、シヤム米にインド市場を侵蝕されて、米價崩落に苦んでゐる、蓋しビルマの作米法や精米法は十年一日舊來の原始的農耕法を盲目的に墨守して施肥もせず、除草もせず自然に放任して品質の改良をはからない同時に精米の方法も舊式で且不當な輸出税をかけられて、今日の如き不況に沈淪したのである。但し將來日本はビルマからも米を輸入しなければならなくなるから、この國の米作に

ついては今から大に研究する必要があると思ふ。

○地球學團講演會

既報の如く學團と東京地質學會及び岩石礦床學會の聯合講演會は京都で開催の豫定であつたが京都帝國大學地質學礦物學教室の火災の爲め、變更せられて四月四日五日の兩日に東京帝國大學工學部第四・五號教室で開催された。四日午前には地質學會總會後引續いて小川博士立ち日本火山學會設立の必要を力説せられ、午後には二部に分れ一部は主として岩石學礦物學に關する方面、二部は地史學地形學に關する方面の講演があり、夕刻六時からは懇親會に移つて三學會の會員團員は寛いで一夕の歡を共にした。次の五日には午前は昨日の如く二部に分れ、午後は合して主として鐵床學、石油地質學に關する講演があつた。兩日の講演はどれも演者の深い研究の發表であつて聽者を益する事多大であつた。京都の教室からは吉澤、竹山、横山の三氏が講演に加はり、本間氏は十一日に通俗講演をされ、また學生諸氏も參會された。鹿兒島縣の阿多學士は遠路を物とせず參會せられ同縣下の温泉に就いての研究を發表された。なほ在京及近縣の團員を別として秋田の大橋氏、金澤の望月氏の講演もあり參會者中には滿鐵の村上博士、静岡の中山氏も見えた。六日七日には伊豆に見學旅行をした。鐵道省の渡邊技師の指導で丹那隧道、丹那盆地に於ける斷層等を見學した。日本火山學會は五日に委員會、十一日に小委員會を開き暫定會則を可決したらしい。我々は其誕生を心から祝福しやう。（J、M）